

虚無からの脱却



中西 周次*

Breakaway from Nihilistic World

Key Words : Philosophy, Nature, Nihilistic World

1. ことの発端

私が初めて自然科学に対して虚無を感じたのは博士後期課程の学生として博士論文研究に勤しんでいた頃である。当時は自分の研究が思うように進まず苦しいことも多かったが、それでも自然科学の研究はただただ楽しく、自分の歩んでいる方向に関して何の悩みも迷いも見つからなかった。その博士論文研究も何とかまとまる算段がつき、公聴会の日程も決まった頃、不意に私は、「何故、博士号は Ph.D (Doctor of Philosophy) というのだろうか？ そもそも Philosophy (哲学) とは何だろうか？」と考えた。今から思えば、これは私の精神安定上、自問してはいけないものであった。これをきっかけに、私の自然科学、哲学に対する考え方、世界観、人生観は全てまとめて混沌への一途を辿り始める。

2. 混沌の渦の中へ

Ph.D という呼称に関する疑問はその時に初めて持ったわけでもなく、またその呼称の意味についても分かっているつもりでいた。しかし、何故かこのときだけは深く考えてしまったのである。この単純な問いも考えてみると奥が深く、その疑問はいろいろなところに飛び火した。「そもそも哲学とは何か？」「哲

学の中での自然科学の意義は何か？」「自然科学の目指すところ (普遍的真理の解明) は実現可能か？」「それが不可能だとすると人はどういう哲学にもとづいて生きるべきか？」「そもそも人にとって哲学とは？」。無限ループである。ループを 1 周するたびに、より深い思考で次のループを辿るので、正確には無限スパイラルと言えるかもしれない。実際にはこうしたスパイラル的思考プロセスが幾つも互いに縄れ合いながら混在し、私の頭の中はぐるぐると混沌の渦の中へ引きずり込まれていく。

3. 自然科学

現代における自然科学の学問体系は西洋哲学に基づいて構築されてきたものであると言える。西洋哲学の歴史は、古代ギリシア時代に入々が神話やおとぎ話から離れて客観的な世界説明を試みた時に始まった。つまり、哲学創世記には確かに「自然科学=哲学」の関係があった。Ph.D の呼称に関しては、当時の哲学者達の世界に対する新しい対面の仕方に敬意を表し、その姿勢に習いたいという意味合いも込めて、現代でもその呼称が使われているのだろうと一応の納得はできる。しかし、その「自然科学=哲学」の関係は、キリスト教の誕生や様々な社会情勢の変化などの影響を受けながら、時代と共に大きく変わってきた。今では「自然科学 $\in$ 哲学」という捉えの方がより適切であろう。このように考えると、自然科学 (世界の普遍的真理) を探求するには、その母体としての哲学の理解 (少なくとも理解しようとする姿勢) が不可欠のように思えてくる。

哲学とは二つの大きな問い、すなわち (一) どのように世界は成立しているのか、(二) 人生の意味は何か、に対する答えを探す学問である、と私は自分自身の中で整理していた。これは哲学を“自然科学哲学”と“それ以外”とに分けたともいえる。この分け方は



* Shuji NAKANISHI
1973年8月生
2000年大阪大学大学院基礎工学研究科・
化学系専攻・博士後期課程中退
現在、大阪大学大学院基礎工学研究科・
物質創成専攻・機能物質化学領域、助手、
博士 (理学)、非線形科学・電気化学
TEL 06-6850-6238
FAX 06-6850-6238
E-mail : shuji@chem.es.osaka-u.
ac.jp

専門的立場から見ると不適當であろうが、少なくとも私が「自然科学とは何か」を自問する上では有効な整理の仕方であった。前者は“無為なる自然”の真理を探ろうというものであり、そこに人々の意図や希望、信念の入ってくる余地はない。一方、後者は人々の価値観や道徳観、宗教観などと密接に関連する人生や社会に対する問いである。こう考えると前者がまさに“自然科学”であり、後者は“人間科学”とでも呼ぶべきもののように思える。しかし、事はこんなに単純なのだろうか？

4. 虚無感

自然科学哲学は世界(自然)を作る唯一の真理を明らかにしようとする人類の知的営みの結晶だ。完全無為な世界(自然)は、人々の信念や宗教などと無関係に、客観的な論証によってのみ正確に記述されるものであることは疑いようがない。しかし、その普遍的な唯一の真理を探究しようする試みは良いとしても、これは本当に実現可能なのだろうか？ノーベル賞を受賞されたある自然科学者が何かの対談で、「蟻が何故自分が蟻なのかを知ることが出来ないように、人類は人類自身が何を目的に、何故存在しているのかを知ることが出来ないのかもしれない」というような趣旨のことを述べていた。私もそう思う。世界の一構成要素に過ぎない人類が自分の存在理由すら明らかにできないのであれば、世界の普遍的真理の解明など到底無理なような気がしてくる。

過去の偉大な賢人たちは勇敢にもこの問題に取り組んできた。この問題に取り組むには人の一生はあまりに短い。それでも人々はそのさらに先人たちの考えを元にそれを発展させて、その英知を時代を越えて蓄積し、確実に普遍的な真理へと近づいてきた。この先、1000年も経てば一層多くのことが分かるだろう。しかし、さらにずっとずっと長い時間が経てば、完全無為で非情な自然は、これらの知識を、そ

して人類までももやがて灰にしてしまう。こうして一つの世界(宇宙)が終わり次の世界が始まると、我々はまたソクラテスやデカルト、アインシュタインなどの登場を待たなければならない。なんと二度手間、三度手間だろう。

こんな考えても仕方の無いことを凡人の私は世界の隅で考え、自然科学に対してある種の虚無感を抱いている。

5. 虚無からの脱却を目指して

この虚無から脱出する唯一の方法は、物事をもっと短期的視野で捉えて自分の信念に基づいて生きようということだと思う。自分なりの人生の目的を探しながら、その人生をおくるということだと思う。その人生の中で無為なる世界を見つめ、人類共通の世界像としての自然科学を構築することだと思う。こう考えて、私は哲学を“自然科学哲学”と“それ以外”に分けて捉えていたことの誤りに気が付いた。自然科学は完全無為な世界の普遍的真理を追究するものではあるが、それが人類によって構築されている以上、人類の信念や道徳観などと切っては切り離せないものだ。自然は無為だが自然科学は無為ではない。どうやら、こうしたある種のねじれ構造が私の無限スパイラル状思考回路の根源のようだ。

現在、32歳の私はまだここまでしか考えが至っておらず、無限スパイラルからの脱却法は見つかっていない。現時点での自然科学への対峙の仕方を自分なりに持つには持ったが、それでもまだ虚無からの脱却の糸口は見えない。自然科学を探究する者として失格なのかもしれない。今はただ、この迷いが若さゆえのものだと良いのにと一途の淡い望みを抱いている。何十年か後には、この虚無から脱し、自然科学哲学に対して納得できる答えが見つかっているとよいな、と日々ただぼんやりと混沌の渦の中で考えている。

